エウロパの旅人―建国篇

山田　潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エウロパの旅人―建国篇

【Ｎコード】
Ｎ９７５６Ｚ

【作者名】
山田　潤

【あらすじ】
いよいよ、国の再興が本格派する。丈、雄一郎、正、それぞれのパーティーは生存者を探し出し、氷のドーム建造に尽力する。また、生存者のコミュニティ同士が連絡を取り合い、技術を共有しようとする動きも見られ始めていた。そんな時、ホモローチのセカンドジェネレーション（第二世代）の脅威が十州道のコミュニティを襲い、新たな闘いの幕が開く。生存者達の運命は、そして被災前、大量に出荷されたバイオ流体緩衝材の行方が明らかになって行く。
トリロジー、エウロパの旅人　最終章の予定で連載を始めますが、

展開次第では新章への突入も有り得ます。

いざ、鎌倉

いくら僕が視覚を開放しようと、俯瞰で見ることのできるサイトに捜索能力は及ばない。彼女のお陰で生存者を見つけ出す効率はぐんと上がっていた。また、ドーム建造という具体的な復興プランは持たずとも、あれほどの災禍を生き延びた人々の中にはバイタリティと克己心に富んだ方が多く、身を寄せ合った人々は力を合わせて生活を再建しようとしていた。

そしてコミュニティ同士が連絡を取り合えるようになると、それぞれの技術は離れたコミュニティにも速やかに浸透して行く。医療技術のないコミュニティには医師が派遣され、発電設備が作れないところには電気技師が送られた。労働力のあるコミュニティでは僕達の助力なしでドームの建造が始まっているとも聞いている。これが伊都淵さんの目指す未来だったのだろうか、僕は彼の先見性に痛く感心していた。

外壁を積み上げる段になるとそのコミュニティを後にしていた僕にとって、工事の進捗状況は非常に気になるものだったが、ようやくプロデュースドバイ所教授の脳味噌の使い方にも慣れ、サイトの記憶を投影する――つまり、彼女に見てきてもらった映像を僕も見ることができるようになっていた。手を振る真柴さんや斎藤さん達の姿、佐伯医師があちこちのコミュニティに出張される姿を脳裏に映し出し、僕達の使命が順調に果たされていたことに安堵した。

「あなた方のお陰で、ここの人々も希望を持つことが出来ました」

僕と原田兄弟は、およそ１４００年前になんとか天皇が造ったという大きな寺院跡に居た。政変・飢饉・干ばつ・大震災に天然痘の流行と、苦難の時代に建てられたこの寺院は医療や福祉に熱心だったそうだ。その意思を明確に引き継がれたのか、ここでただひとり命を取り止めた泰然法師だ。彼は存在を否定されていた地下建造物に生存者を集め、軽装だった人々に法衣を与えて暖を取らせ、食料

として凍死した鹿の肉を振舞ったと言う。平時なら言語道断だと責められもしようが、この非常時に於いては素晴らしい判断だったと言えよう。

余談だが僕は結婚する前、日向子とここを訪れたことがある。ポケットに入れておいた鹿せんべいごと尻を齧られズボンを涎でびしょびしょにされた。多くの観光客が居て鹿を追いかけ回す訳にも行かず、いつか復讐してやろうと思っていた。泰然法師は意図せぬままに僕の恨みを晴らしてくれていたのだった。思わず知らず下がる溜飲に、原田兄弟は妙な顔で僕を見つめたものだった。

「いえ、我々は東北のカリスマの命に従って動いているだけですから。如何でしょう、こちらでもドームの建造を考えてはいただけませんか？」

「知恵とお力を拝借出来るなら願ってもないお申し出です。なにせ拙僧は寺のこと以外、何も知りませぬ故」

「なれば、早速有志を募ってバイオ流体の培養にかかりたいと存じます故」

……簡単に仰々しい物言いがうつってしまう辺り、僕はまだ自己が確立されていないようだ。

「じゃあ、その役目は拙者どもが、しかと仰せつかったでござる」

僕の憂慮など歯牙にもかけぬ様子で原田兄弟が言い、彼等は生存者の集まる中室と呼ばれるところへ身体を低くして走って行く。それじゃあ忍者だよ……

「ほっほっほ、楽しい方々ですな」

恐縮する僕をよそに、泰然法師は高らかに笑われた。これが本当の泰然自若ってヤツなのだな。

実のところ、僕は宗教家と呼ばれる人々にあまり良い印象を抱いてはなかった。彼等の説く教義だか教理だかは高尚だが、彼等自身、本当にそれに沿った生活をしているものだろうかという疑問があった。　亡くなった人々につけられる名前に値段の差があるのも納得が行かなかった。有り難がる物は目に見えず、聞いててもちんぷん

かんぷんな経文も払う金額で違うと言う。ただ、これもやはり？人？によるのだろう。痴漢行為をする警官も居れば教師も（僕はやってない）居る。僧侶にせよ、一般人にせよ、悪いヤツは悪い。良い人は良いのだな、と思いました。何だか小学生の作文みたいになってしまった……

そんなこんなで僕達の次の仕事はこの寺院跡になった。解体された鹿の内臓がサイトの御馳走となり、犬や猫を掘り返す必要もない。山ほどの凍った鹿が敷地内に埋もれていた。

このコミュニティの住人は参道で土産物屋や食堂を営んでおられた方々が多く、女性比率と年齢層が高めだ。ご主人は五十代、六十代といったところで、二十代は土産物屋の看板娘だった女性と駐車料金の徴収係だった同じく女性がひとり、倒れた大仏の隙間に潜り込んで難を逃れた観光客の男性がひとりの都合三名。警備員の格好をした男性が二人居たが、どちらも四十代だった。これでドーム建造が進むだろうか、という懸念が僕にはあった。

「へーえ、そんなんできるんやあ」

「せやなあ、穴ぐらに住むよか、そっちのほうがええなあ」

「カリスマはんもえらいもん、思いつきよんなあ」

関西弁でそう聞かされると、何やら危機感が遠ざかって行く気がした。だが、和んでいてドーム建造は始まらない。食料がふんだんにあったことから、僕はあることを思いつく。

「是非お力をお借りしたいんですが」

――了解、二人送り込もう。

真柴さんは労働力の派遣を快諾してくれた。生まれ変わったように、勤勉になった中島、遠藤の両名を派遣してくれると言う。

――ここには若い男性は少ないが、病院の技師だった二人がやる気になっている。ただ、我々には交通手段がない。

「迎えにあがります」

佐伯医師の居るコミュニティからもふたりの男性を借り出す約束を取り付けた。

「こういう土地柄ですからな、重機リースの会社となると街の方まで行かんと……あっ、ちょっと待ってください。法華堂を工事しておったはずです。あそこに建設業者がぎょうさんの重機を持ち込んでおりましたな」
法師の話を聞いた僕達は氷の丘陵地帯へと向かう。ショベルカーでも見つかれば大幅な労力の軽減が図れる。
現場では都合良く数台の重機とダンプカーが折り重なっていてくれたが、転倒したそれらのバッテリーから電解液が流れ出しておりスタータは回らない。大型のディーゼル発電機もあったのでなんとか持って帰れないものか……と、唇を噛んで考える僕に海地が言った。
「押しがけすれば？」
そうだっ！　何故、それに気づかなかったのだろう。丘陵地を上ってきた訳だから下り坂がある。そして僕に馬鹿力があることをすっかり忘れていた。えらい、えらい、と風真に頭を撫でられた海地は迷惑そうな顔をしていたが、僕は上機嫌となっていた。
「押すぞ、ギアは3速ぐらいに入れておいて、勢いがついたらクラッチを離すんだ」
「あいよー」
ショベルカーの運転席には風真まで乗り込んでいる。どっちか手伝ってくれたらどうなんだよ。
９．０２以来、二ヶ月半ほど火を入れられることのなかったエンジンは、なかなか息を吹き返してくれない。それもそのはず、氷の坂道には一切の路面抵抗がなく、駆動軸側からクランクシャフトを回してくれるだけの力が得られないのだ。かかりかけたエンジンが雄叫びを上げる前にショベルカーはすーっと滑って行ってしまう。結局、平坦路を押す羽目となった。キャタピラで走行する重機だ、僕の馬鹿力をもってしても時速１０ｋｍまで上げるのは容易ではない。数百メートル押した辺りで、ようやくエンジンがかかり、僕は思いっきり排気ガスを吸い込んでしまった。
「ここで待ってるから二人で発電機を取ってきてくれよ、重機の取

り扱いは慣れたもんだろ？」
四肢は梓先生ご自慢の品でも心臓はオリジナルだ。僕の心臓と呼吸器系は音を上げそうになっていた。へたりこんで力なく声を上げる僕に車上の二人は楽しそうに返してくる。
「りょーかーい」
いい気なもんだ……
疲労困憊して寺院跡に帰り着いた僕に、真柴さんから連絡が入った。
――二人は先ほど送り出した。ところで古都府は知っているかい？
あそこの病院とコンベンションホールに２０名以上の生存者が居るそうなんだ。短波無線で連絡が取れた。氷のドーム建造に興味を持ってくれている、なんとかして胚とトコログリアを届けてやることはできないだろうか？　培養が済み次第、我々が建造の手伝いに出向く。
頼もしい言葉だった。真柴さんや佐伯医師のような人々が、きっとどこかに生き残っている。いまは孤立していても、このネットワークは必ず繋がる日が来るだろう。そしてその時こそ、日本再興の日になるはずだ。
「サイトに頼んでみます」
伝説では赤ん坊をさらうとまで言われたイヌワシのサイトだ。５００ミリグラム容器を数個運ぶぐらい雑作もないだろう。伊都淵さんの掲げる日本再建プロジェクトは、いま間違いなく独立独歩の道を歩み出していた。

Sympathy

「スマートグリッド……ですか？」
　石井の提案に、作業の手を止めた雄一郎が聞き返す。
「ええ、今のところ風が止む心配はありませんが、東北のカリスマが言われる通り、再度の地軸ズレが起きた時、この場所が安定した風力を得られるとも限りません。ガスタービン発電と太陽光発電、バイナリ地熱発電も合せて電力の安定化を図りたいと思います。余乗分は新たに発見されたコミュニティに回せるよう、送電設備も作って行きたいと考えています。作業を終えても電力班はドーム建造に回さず、そのまま発電プラントの構築に就かせたいのですがどうでしょう、許可をいただけませんか？」
勤勉な労働力の多いこのコミュニティにおけるドーム建造作業は順調で、既に外壁の積み上げにかかっていた。地下住居もあり、住民全員がトコログリアの接種を済ませている。一日や二日の遅れが彼等の生命を脅かすことにはならないだろうとの見通しが雄一郎にはあった。
「私に許可を求める必要はありません。あなた方が他の生存者のことを考えていただけるのはありがたいです。どこにも技術者が残っておられる保証はありません。是非、そちらを進めて下さい」
　何年か前、原発事故で出た放射性物質を含む廃棄物の受け入れを拒否した自治体があったことを雄一郎は思い出していた。？頑張ろう東北？？日本はひとつ？の美辞麗句は、危機感が足元に及んだ途端？ふるさとを放射性物質から守ろう？？子供を放射性物質から守ろう？とすり替えられていた。物ばかりが溢れ、痛みを分け合おうとする気持ちをなくしてしまったこの国で、教団時代、周辺住民から蛇蝎の如く忌避されていた彼等が、そんな申し出をしてくれたことが雄一郎は嬉しかった。
「良かった！　早速、中川さんにも伝えてきます。忙しくなるぞー」

石井が駆け出して行く。ドームの基礎を囲むように設置された風車群に向かって行く石井の姿に、一ヶ月前のひ弱だったデクの面影はない。
「大した変化ですね」
榊が肩を並べてきた。
「日常の小さな躓きが、彼等に魔の時を呼び込ませ、そこにつけ込んだ連中にいいように利用されていただけなんだろうな。誰しもが彼等のようになってしまう可能性はあった。自分で考える力を取り戻した彼等にもう心配はない。そろそろ生存者捜索に戻る時期なのかも知れない」
「去るとなると案外名残惜しいもんですね」
すっと背後に立った井上が感慨深げな声で言った。
「ああ。だが、そうも言ってはおられまい。今夜にでも話すとしよう」

「えっ！　もう行かれてしまうんですか？」
石井が驚いたように席を立つ。その声に夕食のテーブルに着いた全員の視線が注がれた。
「鈴木さん達が、ここを離れられると言われたのよ」
石井の右隣に居た乾という中年女性が状況を補足して伝える。よく通る声だった。
「他のパーティーは既に複数のドーム建造に携わっており、完成したものもあると聞いています。競争意識はありませんがトコログリアの残量も心細くなってきました。補充に戻ることにでもなれば、遠回りをして救える命を救えなくなる場合だってあるでしょう。出発を考えたのは、そのせいでもあるんです」
「でも……鈴木さん達に教わりたいことが、まだまだたくさんあるんです」
「我々の都合で引き止める訳には行かないよ」
口をへの字に結んだ石井に、隣に座った中川が肩に手を置いて言

った。この二人がコミュニティのリーダー格となっていた。
「私に教えられることなど何もありません。あなた方は人を思いやる気持ちをお持ちですし、住民の皆さん全員が自分のなすべきことを知り、それに打ち込んでおられます。我々が皆さんから学ばせていただいているくらいです。なあ」
　同意を求められた榊と井上が厳かに頷く。犬達の世話をしてくれていた少女が雄一郎のテーブルに歩み寄ってきた。トコログリアの接種を最初に受けたリエと呼ばれている娘だ。彼女は震える声で言った。
「いつかまた、きっと逢えますよね」
「君が勇気を出してトコログリアの接種を受けてくれたお陰で皆さんがこうしていられる。ありがとう」
雄一郎が立って長く伸びたテーブルに座った面々を見渡す。屋外で監視にあたっている数名を除く住民全員が揃っていた。
「我々はあなた方をひとりとして忘れることはありません。いつか全ての生存者が安心して生活出来るようになった時、我々はもう一度ここを訪ねたいと思います。立派なドームを、発電プラントを作り上げて下さい。困った時には仲間の誰かが必ず駆けつけるようにします」
　リエは雄一郎の背中に顔を埋めて泣きじゃくっていた。井上がその背中をさする。まばらに沸き起こった拍手がスタンディングオベーションに変わっていった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9756z/

エウロパの旅人―建国篇

2012年1月4日08時48分発行